４４号　令和６年１２月１０日

＜学校教育目標＞　自ら伸びる　ともに伸びる

校長便り（職員編）

呉市立阿賀小学校
安宗　誠

脳科学者の視点から見た「いじめ」

中野信子（脳科学者）著『ヒトは「いじめ」をやめられない』（小学館新書）の中から心に留まったことをいくらか書き出してみますと・・・，

１　「オキシトシン」とは愛情ホルモン。分泌され過ぎると，「妬み」や人を排除する感情が高まってしまう。
２　「セロトニン」とは安心ホルモン。分泌が少ないと，不安を感じやすくなる。理性が保てず，衝動行動が増える。
３　「ドーパミン」とは快感ホルモン。相手を攻撃するときにもドーパミンが分泌される。
４　規範意識が高い集団ほど，いじめが起こりやすい
５　いじめは小学校高学年から中学校２年生くらいに深刻化しやすい。
　・「テストステロン」（攻撃性を強めるホルモン）の分泌量が９歳から急増，１５歳でピークとなることが影響。
　・前頭前野の「ブレーキ機能」はそのころまでは未熟。成熟するのは３０歳前後。
６　いじめが増える時期は６月と１１月。
　・この時期は日照時間の変わる時期。これに合わせて「セロトニン（安心ホルモン）」の分泌量が減少する。「２」を参照。
　・この時期は運動会や学習発表会等の大きな行事が終わった直後の時期。大きな行事では集団での団結が強調されるため，「オキシトシン」の分泌が高まり，集団から逸脱する行動に皆が過敏になりやすい。

筆者は最後に次のようなことを述べて締めくくっています。

「脳科学的には，人の脳には種を保存するためにいじめをするための機能が組み込まれている可能性が高い。しかし，だからといって，そのことは倫理的に到底許されることではない。様々な人に接し，刺激を受ける中で，善の中にある悪，悪の中になる善を学習する場として学校・家庭・地域が機能し続けることが必要であろう。」

いじめの加害者にも被害者にもならないよう，我々大人が子供達を導き続けるに当たっては，このような医学的な知見も踏まえておくこともとても大切なことだと思います。